京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

平成29年 9月21日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　辻　井　昭　雄　様

所属部局・研究科　地球環境学舎

職 名・学 年　博士課程2年

氏　　名　重 原 奈津子

助成の種類	**平成29年度　・　国際研究集会発表助成**	
研究集会名	第12回国際生態学会	
発表形式	☐ 招待　・　☐ 口頭　・　☑ ポスター　・　☐ その他( )	
発表題目	How Did Rural Landscape Under Human Intervention Change in Japan? : A Case Study in Tsushima City, Nagasaki Prefecture	
開催場所	中華人民共和国・北京	
渡航期間	平成29年 8月20日　～　平成29年 8月25日	
成果の概要	**タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　☑ 無　☐ 有(　　)**	
会計報告	交付を受けた助成金額	150,000円
	使用した助成金額	150,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	参加登録費、渡航費(航空チケット)、 渡航費(空港までの国内交通費)、宿泊費、 宿泊場所から会場までの交通費(地下鉄)として 計180,000円を支出。 そのうち150,000円に助成金を充当。
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 海外の国際会議への参加は、渡航費、宿泊費などが高くなってしまうことから、経済的な面で厳しい部分がある。その点今回は助成をいただけたことで、負担が大きく軽減され、集中して大会に参加することができた。助成金の用途についても、参加登録費や旅費など自由度が高いことや、大会参加前に助成額を受け取ることができ、非常にありがたかった。	

成果の概要/重原奈津子

1．大会概要

大会名：第 12 回　国際生態学会

開催地：中華人民共和国・北京

滞在中のスケジュール：

2017 年 8 月 20 日　入国

8 月 21 日　9:00～オープニングセレモニー、全体会議、各セッションに参加

8 月 22 日　8:30～各セッションに参加、17:00～18:00　ポスター発表、Congress Banquet に参加

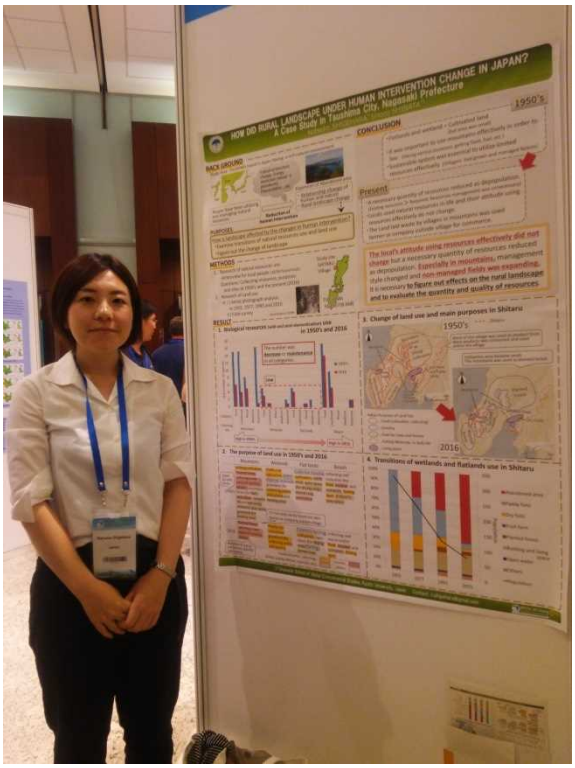
8 月 23 日　8:30～各セッションに参加

8 月 24 日　8:30～各セッションに参加

8 月 25 日　帰国

2．ポスター発表の内容

発表タイトル：HOW DID RURAL LANDSCAPE UNDER HUMAN INTERVENTION CHANGE IN JAPAN?　：A Case Study in Tsushima City, Nagasaki Prefecture



概要：人々は古くから集落周辺にある自然環境を利用して生活を営んできた。農村部の自然環境はその利用の影響を大きく受けて形成されたものであり、近年、生態系サービスを発揮する重要な環境であるとして注目が集まっている。一方で、日本の農村では高度経済成長を機に一次産業は次第に衰退していった。都市部への人口流出が生じ、さらにガス電気などが整備され近代化が進んだことで、彼らの暮らしは大きく変化した。本研究は現在、急激な人口減少に直面している長崎県対馬市の志多留地区を対象にして、地域資源の利用がまだ日常生活の中で行われていたとされる 1950 年から現在にかけて、どのように変化してきたかを土地利用と生物資源利用の 2 つの視点から明らかにした。また、それらが地域の景観にどのような影響を与えているか考察を行った。その結果、1950 年代には、人々は平地部分のすべてを耕作地として利用しており、山間部では、焼畑農業とシイタケ栽培、炭焼きが行われていた。人口分の食料を確保するため、また、生活資源を得るために、山林部をいかに持続的に利活用するかは重要な課題であり、その結果として、森林の利用（伐採、耕作等）と再生が持続的な形で繰り返され、その中で様々な生物資源が採取される山林の利用システムが形成されてきたと考えられた。一方現在は、人口減少によ

って、必要な資源量が減少し、結果として、利用度も低くなっている。特に食料生産に関する土地利用については、その必要性、さらには高齢化によってその維持が難しくなっており、1955 年に比べ、耕作地は 1/10 に減少していた。生物資源利用に関しては、1950 年代には山林が資源利用の採取場所として最もよく利用されていたが、現在利用種数が多いのは、海岸部である。波打ち際に浮かぶ藻を肥料として畑に投入したり、ヒジキ、ウニなどといった磯資源を食用、そして現金収入を目的として現在も利用が継続されており、その利用スタイルは 1950 年代と大きく変化していない。しかしながら、砂浜にいたマテガイなど、資源自体がなくなってしまったために現在は採取することが出来なくなっている種もあり、磯資源全体に対しても資源量の減少の声が聞かれた。

志多留地区において、生活の中での資源を利用する地域住民の姿勢は現在も大きく変化していない。しかしながら、土地利用については、1950 年代から大きく変化し、平野部では耕作放棄地が増加している。また以前は持続的に使われていた山林もその大部分が利用されないそして管理意識化にないエリアとなっている。今後は、土地利用の変化が、生物資源の質と量にどのような影響を与えているか評価するとともに、農村部の管理方策について検討していく必要がある。

3. 成果

本大会のテーマは Ecology and Civilization in a Changing World であり、報告者の研究は、日本の農村において、高度経済成長を経て近代化が進む過程で、地域の自然と住民との関係性がどのように変化してきたかを明らかにしたものであることから、大会のテーマとも関連性の高い研究の紹介となったと思っている。また、他の研究では、聞き取りを方法として取り入れているものはほとんどなく、本研究では、地域住民に対する聞き取り調査をもとに自然環境と人との関係性について考察を行っていることから、議論の幅を広げることができたと考えている。

個人的な成果としては、各国の報告を聞くことで、現在のトピックスについて知ることができた。自身の研究のトピックスの一つである生態系サービスについて、その評価手法や研究内での位置づけなどが参考になった。また、研究と関連性の高いテーマに限らず、都市部の研究など、少し離れた分野の研究発表にも参加し、他分野の中にも自身の研究との関連を発見するなど、新たな知見を得ることができた。ポスター発表時には、韓国やカナダ、中国など、他の国の方と話をすることができ、研究に関する意見や、他の地域での研究に関する情報をもらうなど、自身の研究の結果について、より深く考察を行うことができた。

本大会への参加により、新たな知見を得るとともに、自身の研究について議論の幅を広げることができた。今後は、本大会参加で得られた知見を活かし、自身の研究活動をより良いものにしていくとともに、積極的に国際会議の場へも参加していきたいと考えている。